



アゴラ —鶴見大学図書館報—  
第 140 号 2013 年 3 月 14 日発行  
編集・発行 鶴見大学図書館  
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3  
<http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>

学生たちによる展示とその解題のこころみ(4) 2013 年 1 月 10 日(木)ー1 月 16 日(水)

図書館 1 階の展示スペースで『西洋の稀覯書を見るー写本と初期刊本』と題して、鶴見大学図書館収蔵の貴重書から調査研究した成果を展示した。本号は展示目録をもとに構成した。

目次		
貴重書室収蔵の写本と初期刊本	西洋書誌学担当 池田 早苗	p. 1
グレゴリオの由来と受容	4 年 笠原 友貴	p. 4
ネウマ譜の記譜と変化	4 年 神谷 洋輔	p. 5
中世ヨーロッパで使用された羊皮紙	4 年 大沢 春花	p. 7
インキュナブラの表紙と金具	4 年 渡邊 里美	p. 9
ラテン語写本 (本文、英語訳、日本語訳)		p. 12

### 貴重書室収蔵の写本と初期刊本

西洋書誌学担当 池田 早苗

西洋書誌学を学ぶクラスで進めている、「西洋の稀覯書を見る」と題する 4 年目は、西洋の「写本」manuscript を中心に取り組みました。manuscript とは、「手書きの(文書)」という意味なので、西洋の彩色された写本や西洋書体の写本だけでなく、有名な人の手書きの作品や書簡も manuscript です。グーテンベルクによる活版印刷術が行われた 15 世紀よりも前の時代に、写本は比較的多く残されました。その後、印刷術が広まりつつあった過程では、印刷本を手書きで書き写した写本もありました。時代が進むにつれ、著名人の書簡やメモ notes などもあり、書体などによる時代の変遷が映し出されます。今回は、貴重書室に収蔵される manuscript の中から、大きな羊皮紙<sup>1</sup>に書かれたラテン語写本を中心に調べ、比べて、学びました。授業を通して、「ホンモノ」に接した感覚を大切に、学生達が自らの興味関心を持った点について調査し考察したレポートをまとめ、調査対象の貴重書を展示しました。

日本では、西洋の写本を間近に見る機会が少ないので、書写材料(獣皮、鳥の羽を使ったペン、木の虫こぶを主材料としたインク、自然の鉱物から採った彩色など)の観察や実際に触れてみることも、またインクや獣皮・紙などの色の変化に注目することからはじめ、それらを用いて文字や音を記すことの意味を考えました。初期刊本は、写本の伝統を受け継ぎながら、活版印刷術という新たなメディアによって誕生した点が注目されるどころです。そうしたメディアの変化を、写本から刊本に向かって見ていくことで発見することもあります。書物を所有していた当時の人々の関心の高さが書物そのものに反映される「所有者の変遷」

<sup>1</sup> 用いた動物の皮の種類により、パーチメント parchment、ヴェラム vellum、など異なる語があるが、現在、研究者間では、現存する写本から確実にこれらの皮の違いを判別することが難しく、総称して獣皮と呼ぶことも少なくない。パーチメント、ヴェラムと呼んでも羊の皮とは限らない。



展示 6. 『プリスキアヌスのラテン語文法』(ヴェニス、1495 年)

[*Opera: Priscianus; commented by Joannes de Aingre*] (Venetiarum, 1495) [鶴見 892.9/P 1082575]

インキュナブラの一書。イタリアのベネディクト会が編集したプリスキアヌスのラテン語文法書。

1 段組で文章が生まれ、活字は当時イタリアで生み出されたばかりのローマン体を用いて印刷されていて、当時のイタリア・ルネッサンスの進取の気風を受けて作られたことがよく表されている。装丁は、同時代に行われ、背表紙が幅広く皮革に包まれ堅固に作られている。前小口に **PRISCIANUS** と書かれていて、本が通常は前小口を前にして横に積まれていたことがわかる。同時代の書き込みが、本全体にわたり多く書かれていて、本書もまた当時よく利用されたことを示している。

展示 7. 『トマス・グレイの六つの詩のためにベントリーがデザインした詩集』(ロンドン: ドズリー、1753)

*Designs by Mr. Bentley for Six Poems by Mr. T[homas] Gray*  
(London: R. Dodsley, 1753) [鶴見 936.10/G 1017735]

18 世紀英国の代表的詩人のひとりであり、ケンブリッジ大学の学者であったトマス・グレイの詩集に、ベントリーが挿絵と詩とを対比させてデザインした画期的な書。文字と装飾が共に手書きで融和していた写本文化に比して、ベントリーをはじめとした当時の出版に関わる人々が、活字と版画という 2 つのメディアを同じページに取り入れることに挑戦し、挿絵形式をつくりだしたことを示す貴重な書物である<sup>2</sup>。



展示 8. 『詩編集』オウエン・ジョーンズによるデザイン (ロンドン、1861 年) 参考資料

*The Psalms of David, illuminated by Owen Jones* (London, 1861)  
[鶴見 193.33/B 1088782]

建築家でありデザイナーであった、オウエン・ジョーンズ (Owen Jones; 1809-1874) がデザイン・製本した旧約聖書の詩編集。装丁はレリーヴォ製本 (relievo binding) という革装の工程が施されている。本文は、見開き 2 ページごとに異なるデザインで本文を囲むように装飾が描かれている。この印刷方法を多色石版刷り (クロモリトグラフィー chromolithography) というが、ジョーンズはその技法のパイオニアとして活躍した。

展示 2. のネウマ譜に比べ、現代の記譜法により、同じ詩編を朝と夕べの祈りに寄せて、楽譜が書かれている。



<sup>2</sup> 気谷誠『西洋挿絵見聞録—製本・挿絵・蔵書票』(東京・アーツアンドクラフツ、2009), pp. 2-3.

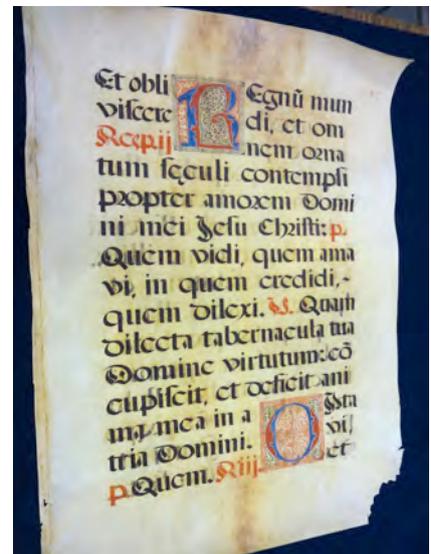
調査書名

グレゴリオ聖歌写本断片(貴重書室収蔵)

グレゴリオ聖歌は、カトリック教会に1500年以上にわたり伝えられ引き継がれてきたラテン語による祈りの歌です。作曲者の名前は残されておらず、特定の人物によって作られたものなのかわかっていないとされていますが、長い歴史の中で発展してきたものであることは、その歴史と歌そのものが語っています。

楽譜が誕生する前に教会で続けられた祈りの歌唱は、何世紀もの間、口伝によって継承されました。キリスト教信者によって歌い継がれたという、その特徴を挙げると、伴奏無しで歌われる単旋律の歌であったことが最も明らかです。単旋律の聖歌は、ミサの典礼文と共に歌われ、ベネディクト会における典礼の基準になったとされ、およそ8世紀以降に書かれた写本にネウマ譜で記されものが残されているとのことです。

グレゴリオの名の由来には諸説があるようです。7世紀初頭のローマ教皇グレゴリウス1世(?540-604)、あるいは別の人物、例えばフランク王国との繋がりが深いとされるグレゴリウス2世(?-731)だという説もあります。中でもグレゴリウス1世説が強いものには、いくつかの理由があります。4世紀以降のキリスト教の急速な普及により、土地個々の影響を受けた、ミラノのアンプロシウス式典礼、フランスのガリア式典礼、スペインのモサラベ式典礼、アイルランドのケルト式典礼などの各地各様の典礼と、その中に織り込まれていた聖歌とが、広範囲に収集され、長い年月をかけて完成した聖歌をグレゴリウス1世の権威と結び付けて受容したいと願った人々によって、グレゴリオ聖歌と呼ばれ、広められたためとのことです。



グレゴリウス1世はのちにグレゴリウス大教皇と呼ばれた教会史上の重要人物で、教会音楽や賛美歌の発達についても忘れてはならない人物であり、讚美歌作者として八編の作品に彼の名が伝えられています<sup>1</sup>。グレゴリオ聖歌は、かつてはグレゴリウス1世の制定によるものと伝えられてきましたが、当時、偉大な一人の人物に様々な事柄を帰する習慣があったため最も重要な教皇であった彼の功績に帰せられたもので、その一部は彼に関係があるとしても、全面的にグレゴリウス1世の業績とすることは現在までの研究の成果としては否定されているようです<sup>2</sup>。

参考文献

- 鈴木考壽 『スペイン・ロマネスクの道』 (東京・筑摩書房、1997), pp. 42-50  
 スチュアート、P. G. マックスウェル 『ローマ教皇歴代誌』 (東京・創元社、1999)  
 セレスチヌ、ソール 「グレゴリオ聖歌の由来と影響」 CiNii、1957  
 デイ、マルコム 『図説キリスト教聖人文化辞典』 (東京・原書房、2006), pp. 72-73  
 ヴィマー、オットー 『図説聖人事典』 (東京・八坂書房、2011)  
 ハーパー、J., 『中世キリスト教の典礼と音楽』 (東京・教文館、2010)  
 原恵、横坂康彦 『新版 讚美歌 その歴史と背景』 (東京・日本キリスト教団出版局、2004)

<sup>1</sup> 原恵、横坂康彦、p. 38

<sup>2</sup> 同上、p. 42

## ネウマ譜の記譜と変化

4年 神谷 洋輔

調査書名

グレゴリオ聖歌写本断片(貴重書室収蔵)

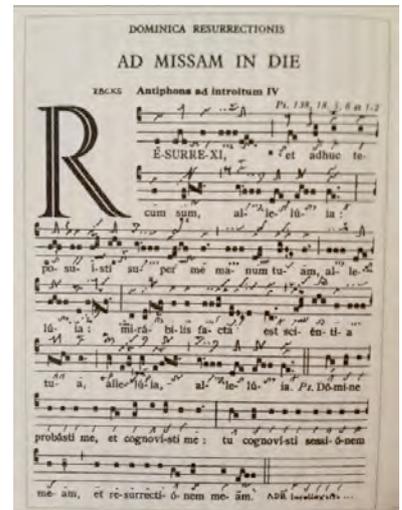
ネウマ譜とは、現在のような音や音楽の記譜法が誕生する以前に、ネウマと呼ばれる「記号」を使って音や旋律の動きを記した楽譜のことである。「ネウマ」とは、「合図」「身振り」などを現わすギリシア語の(νευμα)からきているという<sup>1</sup>。

### 【古ネウマと角形ネウマ】

鶴見大学図書館で閲覧したネウマ譜は、5本線の上に四角形または菱形のような形をした記号が描かれたものであった。これは「角形譜」といわれるものであり、中世の楽譜の表現方法の中では比較的時代の新しいものであった。角形譜は11世紀はじめに導入された「線システム」を基礎にして12世紀に発達したもので、メロディーの音高の流れを正確に伝える事ができるようになっている<sup>2</sup>。

角形譜が現れる前の、ネウマ譜は、歌詞の上、または下に何らかの記号が記されたものであるが、それは現在のような統一的なルールを持ったものではなく、地方または教会によって独自に発達していったのではないかと考えられるそうだ。これは、「古ネウマ」とも呼ばれる。

右の図は『トリプル・グラドゥアーレ』と呼ばれる、特別な編集によるローマ式典礼本である。「特別な編集」とは、この典礼本が、中世のネウマの3つの表現方法を同時に使って音楽を表現しているという楽譜で、興味深い。各4線譜の中央の段に書かれているのは、(上記した)角形譜であり、その上段に、フランス、ラオンの大聖堂学校由来とされるネウマ譜が描かれ、それらの下段には、スイスのザンクト・ガレン修道院からとされるネウマ譜が記されている。



### 【角形ネウマの記号】

上記のように、12-13世紀ごろになると、4本線に角形の音符を記入する角形ネウマが使われるようになるが、鶴見大学図書館で閲覧した角形ネウマに、次のような記号が記載され、それらは、次のような意味を表している。



C音(ハ音)記号。右は現在使われているハ音記号で、Cの文字を図案化したもの。

<sup>1</sup> Cool/Lab「音楽の可視化と記譜」第二章

<sup>2</sup> B・モールバッハ 『中世の音楽世界』 井本响二訳、p. 66



F音(へ音)記号。右は現在使われているへ音記号で、Fの文字を図案化したもの。



音程が上昇、下降、上昇する。

鶴見大学図書館の写本は、最初の4列の左端にへ音記号が記されており、下の2列にはト音記号が記されている。このネウマ譜は1枚全て同じ歌が記載されているのではなく、途中から違う歌が、新たに始まっているということを示す。実際に、前半は交唱歌の2980番であり、後半は聖ヒエロニムス詩編33章22-24節である。



#### まとめ

ネウマ譜を閲覧するのは初めてのことであり、現在の楽譜によく似た、5線上に角形の音符が歌詞に対応して記されているものであったため、ネウマ譜とは、単純に現在の楽譜の元になった古代の楽譜のようなものだと考えたが、それはネウマ譜の中でも後から使われるようになった角形ネウマというものであることが分かった。「ネウマ譜」という言葉が指すものは、4線譜に(歌詞の上に)折れ曲がった線などの記号を用い、単旋律の音を記したもので、旋律の動きなどを視覚的に表現したものだという点が素朴でおもしろい。

(古)ネウマ譜は、角形譜のように音の高さや音程を表現する事はできないが、リズムや微妙な音楽的表現に不備の多い角形譜よりも、音楽的には優れているとする見方もあるようだが、「楽譜」というよりはあくまでも「記号」とあるという印象が強い。一方、角形譜は、見やすさ、汎用性、それに加えて、改善していけばリズムや音楽的表現なども表せるような進化の可能生を持っていたという点で、より洗練された進化形だと言えるだろう。

現在でもグレゴリオ聖歌は、角形ネウマによって記されたものを使用しているそうだが、それは4本線上に表記されたものである。鶴見大学図書館で閲覧したものは、5線で記されていた。4本線のものが公式に使用されている中で、敢えて5線のものを作った理由は何なのだろうか。もしかすると、現在の楽譜に進化する直前の実験的なものだったのかもしれない。

#### 参考文献

B・モールバッハ『中世の音楽世界』井本响二訳(東京・法政大学出版局、2012), pp. 60-67

国元静三「音楽サロン『グレゴリオ聖歌について』」<<http://homepage2.nifty.com/pietro/index.html>>

アクセス: 2012年12月28日

Cool/lab「音楽の可視化と記譜」<<http://www.coollab.jp/index.html>> アクセス: 2013年1月7日

Wikipedia「ネウマ譜」「音部記号」「音符」<<http://ja.wikipedia.org/wiki/>> アクセス: 2012年12月28日

## 中世ヨーロッパで使用された羊皮紙

4年 大沢 春花

調査書名

グレゴリア聖歌写本断片(貴重書室収蔵)

鶴見大学にある「グレゴリア聖歌」写本を閲覧し、羊皮紙に触れたときの質感、厚さ、色などが現代の紙と大きく異なっていると感じた。そこから写本に使われている羊皮紙について興味を持ち、中世の羊皮紙がどのようなもので、どうやって作られたのか、調査し考察した。

### 羊皮紙とは

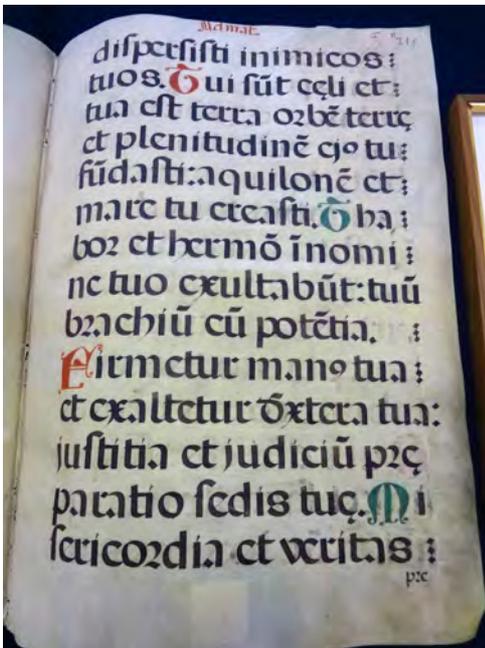
羊皮紙は日本にあまりなじみがないため、どのようなものか、一般に想像しにくい。「羊皮紙」と言われてもピンとこなかったし、この授業で私自身初めて聞いた言葉だった。

「紙」という単語がつくので、現在作られている紙と同じ種類のものであると思うかもしれないが、紙ではなく、「皮革」である。羊皮紙とは羊、又は他の動物の皮を木枠に

張って限界まで伸ばし、ナイフで削って薄くして乾燥させたシート状のものである。植物の繊維をからませた「紙」とは根本的に違う。

また、羊皮紙は紙の普及以前に主に使われていたものであるが、皮でありながら紙のように張りがあり、かつインクや絵具のしみこみが紙よりも少ないため鮮明な色彩を保つという。また、保管方法が正しければ、羊皮紙に書かれた文書や細密画は1000年以上も本来の色彩を保ちながら残すことができる。中世で書かれた写本など後世に残っているものはパピルスよりも羊皮紙が多いそうだ。

鶴見大学の貴重書である「グレゴリア聖歌」が書かれた羊皮紙も、少し黄ばんでいるが、字もくっきりと残ったままで現在でもしっかり読むことができるので、このまま保存しておけば、何百年も持つことができるだろう。



グレゴリア聖歌写本 8葉の1

### 羊皮紙の特徴

羊皮紙は現在でも作られているが、作るのに時間も手間もかかり、需要もそれほど多くないことから、値段は高いようだった。

紙は一般的に表裏同じ色、テクスチャだが、羊皮紙には表裏に違いがある。動物の皮には「毛側」と「肉側」という表裏の区別がある。つまり、毛がついていた側と、肉にくっついていて側がある。一般的に、毛側は若干色が濃く、毛穴の跡や色の濃淡が目立つ場合があるが、肉側は白に近い色である。若い動物からは、白い羊皮紙ができる傾向がある。また、毛側と肉側では、若干、毛側にカールしたり、うねっている場合がある。

羊皮紙を水に濡らした場合はプルプルになるだけで破れず、ゴムのように伸びるだけだ。現在一般に普及している紙は水に濡らすとすぐに破けて使えなくなってしまうものが少なくないので、濡れても破けずにいる羊皮紙は保存性に優れている。

## 羊皮紙の種類

「羊皮紙」には羊という単語が入っているので、羊の皮で作られていると想像するかもしれないが、実際は様々な動物の皮が使われている。

羊・・・薄くて柔らかい。表面もなめらか。ただし皮膚に含まれる脂が多いため、製造に時間がかかる。

仔牛・・・薄くてスムーズ。

山羊・・・純白に近い表面色が多い。毛穴が目立ち、また毛穴が3つずつまとまっている場合が多い。イタリアの写本に多いという。

他にも鹿や豚なども羊皮紙と同様に使われた。

## 羊皮紙の作り方

最初に原皮を水に一昼夜浸しておく。水から引き上げ、流水で洗う。

↓

水が透明になり汚れが出なくなるまで続ける。水槽に新しい水と消石灰を入れ、よくかき混ぜて白濁液を作り、原皮をこの溶液に浸す。一日2～3回棒で皮を動かしかき混ぜる。8日間ほど浸したままにしておく。

↓

この段階で毛が抜けやすくなっているので毛を抜き、水が透明になるまで皮をよく洗う。

↓

皮を取り出し、紐をつけて木枠に縛り付け、張った状態で三日月型をしたナイフで鞣す。日陰で乾かす。少量の水を肉側に振り掛けて再び湿らせて軽石の粉で磨き、さらに水で濡らす。紐をきつく締めて張力が均等にかかるようにする。乾いたら完成だという。

このように、漬け込みや乾燥にかなりの時間を要するため、一枚作成するのに約1か月前後かかる。羊皮紙を作るのにこんなにも時間がかかるとなると、当時の中世のヨーロッパでは、羊皮紙は貴重でかなり高価なものであったに違いない。今は、紙や本は当たり前のように私たちの周りにあり身近なものだが、中世のヨーロッパでは富裕層の人しか羊皮紙や書物を手に入れることができなかったのだろう。

## まとめ

羊皮紙は、紙と比べて、水に濡れても簡単に破けることがなく、何百年先まで保存に耐えることができるという。何百年も昔の貴重な資料が今現在でも見ることが出来るのは、羊皮紙のおかげであるということがあらためてわかった。

鶴見大学が収蔵している「グレゴリア聖歌」も、多少、羊皮紙の色が変わっていても、文字が薄れて読めなくなるということもなく、文字も色もくっきりとしていて見やすかった。もし羊皮紙がなかったら、昔の書物は今残ってなかったかもしれないと考えると、羊皮紙という存在は、日本ではそれほど知られていないものの、とても重要なものであることが分かった。

## 参考文献

カーター、ジョン 『西洋書誌学入門』 横山千晶訳 (東京・図書出版社、1994年)

箕輪成男 『紙と羊皮紙・写本の社会史』 (東京・出版ニュース社、2004年)

## インクナブラの表紙と金具

4年 渡邊 里美

調査書名

1. 写真左 『プリスキアヌスのラテン語文法』(ヴェニス、1495年)

[*Opera: Priscianus; commented by Joannes de Aingre*] (Venetiarum, 1495) 22cm

2. 写真右 教皇グレゴリウス1世『説教集』(ヴェニス、1493年)

[*Homiliae super Euangeliis*] (Venetijs, 1493) 33 cm



中世の西洋書の装丁には、しばしば金属が扱われている。表紙に背表紙や金具を打ち付ける釘や、本と本棚を繋ぐ鎖、本の表紙を保護する為のボス(後述)等が見られる。今回の調査では、2冊に共通するものとして、表紙と裏表紙を固定している留め金に注目し、特徴や相違点をまとめた。



### 留め金

表表紙と裏表紙を留めて勝手に開かない様にしておくためとみられ、現代でも手帳やブックカバー等にその名残が見られる。本の大きさにより設置数は様々であった。

## 1. の本の場合

天と地に1つずつ、小口に2つ、計4つの留め金がある。

表表紙に金属製の金具、裏表紙に皮製の帯の端であったと思われる部分が釘で打ちつけられている。皮の部分は四か所とも根元で切れており、先端に付いていたと思われる留め金のもう一方は消失していた。

表表紙の金具の形状から推察するに、皮帯の先端に付いていた金具は鉤爪の様な形状になっており、表紙同士を固定していたのではないかと考えられる。



鉤が掛かる部分は金属板を外巻きに丸めて突起を作っている。



表表紙側

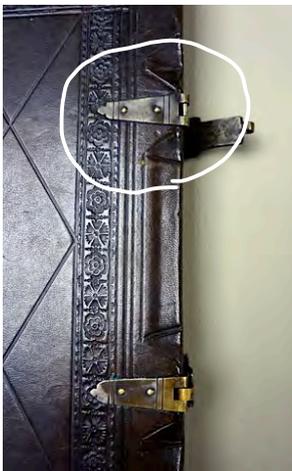


裏表紙側



外巻きの突起

## 2. の本の場合



こちらは1. の本よりも小さく、持ち運びも可能な大きさであるためか、留め具は小口に2つのみである。1.と同様、表側が留め金、裏側が皮と金属製の帯の構造であるが、1.よりも細工が細かく、頑丈である。



表表紙側



裏表紙側

表紙に固定されている面であるが、1. の本が皮をそのまま打ちつけているのに対し、2. では表紙と金属板で皮帯を挟んで釘で固定している。鉤が掛かる部分は内巻きに丸めた穴の中に金属の棒を通しており、1. の本よりも手間がかかっているようだ。



この本では皮革帯を金属板で挟み、皮革が露出している部分が少ない。1. の本の、欠落している金具がこれと同じ構造であったかどうかは不明である。また、推察すると、表紙同士を留めて固定することで湿気等による紙の膨張やふやけを抑える効果もあったのではないかと考えられる。

#### ボス

今回調査した2冊には該当しないが、中世の大きな本には、裏表紙に金属製の突起物(ボスという金具)が取り付けられているものがある。裏表紙の四隅と中央に装着されており、表紙の平面部分自体が床等と直接接触することを防ぎ、表紙の装飾等が摩耗等によって劣化しないよう保護することを目的として付けられている。これは、当時の本は、現代の様に縦に置くのではなく、横に寝かせて置くこととして作られていたためであり、旅行鞆の様な大ぶりのカバンの底に付いているものと用途は同じであろう。

#### 後記

西洋書物の装丁に金属が多く使われていることに驚いた。固定等使われる金属には錆の恐れがあった筈であり、当時の錆のリスクはどの様に捉えられていたのか、興味が湧いた。また、装丁関連の書物には、今回扱った「留め金」に関しての項目が見られず、あまり詳しい情報が得られなかったことが残念である。

#### 参考文献

貴田庄 『西洋の書物工房—ロゼッタ・ストーンからモロッコ革の本まで』 (東京・芳賀書店、2000)

—、『西洋の書物工房』 (東京・芳賀書店、2000)

高宮利行、原田範行 『図説 本と人の歴史事典』 (東京・柏書房、1997)

ピアソン、デイヴィッド 『本 その歴史と未来』 原田範行訳 (東京・ミュージアム図書、2011)

慶應義塾図書館所蔵「グーテンベルク聖書」 アクセス: 2012年12月28日

[http://www.humi.keio.ac.jp/treasures/incunabula/B42-web/b42/lecture/html/04\\_keio/01soutei/chap3\\_soutei.html](http://www.humi.keio.ac.jp/treasures/incunabula/B42-web/b42/lecture/html/04_keio/01soutei/chap3_soutei.html)

展示 1.

Et obli  
viscere  
Resp. ij  
REgnu[m] mun-  
di, et om-  
nem orna-  
tum s[a]eculi contempsi  
propter amorem Domi-  
ni mei Jesu Christi: p.  
Quem vidi, quem ama-  
vi, in quem credidi, ~  
quem dilexi. Js. Quam  
dilecta tabernacula tua  
Domine virtutum: co[n]  
cupiscit, et deficit ani-  
ma mea in a-  
tria Domini.  
p. Quem. Riiij.  
O Jsta  
vi,  
et

[英語訳]

I despised the kingdom of the world, and all the  
beauty of the world, for love of the Lord Jesus  
Christ: whom I saw, whom I loved, in whom I  
have believed, in whom I have delighted.  
How lovely are your tabernacles, O Lord of  
hosts! (Psalter 84.2)  
My soul longs and faints for the courts of the  
Lord. (Psalter 84.3)

[日本語訳]

私は、世を、また世の美しさを厭う  
私が見、愛し、信じ、喜びとした、主イエス・キリストの  
愛のために  
万軍の主よ、あなたのいますところは、どれほど愛さ  
れていることでしょう (詩編 84 章 2 節)

主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです  
(詩編 84 章 3 節)

展示 2.

GRege[m] tuum domine ne de-  
seras pastor bone qui dormire-  
nescis sed semper uigilas.  
ps Nu[n]e dimitt[is].  
or[i]o. Visita q[u]ms.  
vt supra Feria. ij. p.  
passioem din drishid. R. R.  
NON me de-re ling[u]s.  
P Ne discedas a me  
domine. v In adiutori-

[英語訳]

O Lord, do not desert Your flock, O good  
Shepherd; You who know not sleep and who is  
ever watchful. Now you are dismissing.  
(Antiphon 2980)  
Do not abandon me. Do not depart from me, O  
Lord. (Psalter of St. Jerome 34.22-24)

[日本語訳]

主よ あなたの羊を見捨てないで下さい  
よき羊飼いや  
あなたは眠らずにいつも見ていてくださいます  
このしもべを安やかに去らせて下さい(交唱歌 2980)  
主よ、私を見捨てないでください  
遠く離れないでください  
(聖ヒエロニムス詩編 33 章 22-24 節)